

## 明治仏教の靈魂言説——井上円了と妻木直良の比較を中心に——

水谷 香奈

### 問題の所在

井上円了（一八五八—一九一九年）は仏教をはじめとした東洋思想を、実証的な科学と並ぶ近代に対応可能な哲学として再構築することを目指しており、ここでは仏教のもつ合理性（法則性）も重視されていた。一方、円了は初期の著作である『仏教活論序論』（一八八七年）の時点から、輪廻説に対して肯定的な解釈を示している。その理論的な背景も含めて、人間存在と世界（宇宙）との関係について体系的に考察したのが『破唯物論』（一八九八年）であり、一般人向けにその要点をまとめたものが『通俗講義 靈魂不滅論』（一九〇九年、以下『靈魂不滅論』と略す）である。これらの著作において、円了は一貫して「靈魂」の存在と永遠性を主張しており、我々の感覚からみれば、それは円了が目指していた東洋思想の合理的解釈とは一見矛盾しているようにも思える。しかし円了が靈魂の有無を論じるのは、彼にとってそれが単なる信仰上の問題ではなく、人間の生き方に直結した問題として認識されているからである。それは個人的道徳心の励起

のみならず、社会や国家の安定をも視野に入れた議論につながっている。

円了が『破唯物論』の後半で主要なテーマとして扱う「大化論」は、この世界（ひいては宇宙）を活物つまり精神性を持つ巨大な活動的エネルギーの表れと見て、その進化の過程を論じたものであり、これを認識することが可能なのは人間の理性のはたらかきであるとする。マクロとミクロの視点が交錯する壮大な哲学であり、その構想は『哲学新案』（一九〇九年）に引き継がれたとされる「井上一九九〇・七〇七」。つまり、円了晩年の思想的展開を考えたとき、靈魂観は決して無視できない位置づけにあると言える。

一方、一九世紀末から二十世紀初頭にかけては、円了同様靈魂観に関心を寄せ、特に靈魂不滅の観点から執筆されたとみられる書物も多数出版されている。靈魂不滅論の円了哲学における重要性を踏まえた時、筆者の関心は、彼と同じく仏教哲学を研究する立場にあって、円了から何らかの影響を受けた人物がいるのかという点にある。本論では、日蓮宗大学（現立正大学）の講師を経て龍谷大学教授となった妻

木直良（一八七三—一九三四年）の『靈魂論』に着目したい。東洋大  
 学の第二代学長を務めた前田慧雲（一八五五—一九三〇年）は、この  
 『靈魂論』に対して、長年自分が書きたかった内容と「大体の上」に於  
 て格別異存はなく十分希望にかなひたる見解」[妻木一九〇六：四]  
 と高い評価を下している。その中には、業感縁起説、阿頼耶識縁起  
 説、真如縁起説など、円了も参考にしたと思われる様々な仏教思想が  
 列挙され、<sup>〔1〕</sup>部派から大乘に至る縁起説の終着点として天台教学の一念  
 三千が取り上げられて、それを現実の人生に活用可能なかたちで解釈  
 しようとする形跡が見られる。ただし、両者の間には相違点も見られ  
 るため、本論文ではまず円了の提唱した靈魂不滅論の論理構造につい  
 て検討し、続けて妻木の『靈魂論』の記述から、両者の共通点や相違  
 点、およびその理由について考察を試みたいと思う。

## 一 円了の靈魂不滅論の論理構造

### (一) 唯物論排斥の思想的背景と目的

円了が近代化の進む明治後期の日本において、あえて唯物論を批判  
 し靈魂不滅論を主張した思想的背景の解明については、『井上円了選  
 集』第七卷所収の清水乞による解説「井上二〇〇〇…六六七—  
 七〇七」にて簡単にその経緯がまとめられているほか、鈴木由香里  
 「鈴木二〇一一」、ベルナット・マルティ・オロバル「オロバル…  
 二〇一九」による、個別的な事例を扱った先行研究がある。円了が想

定していた論敵は複数あるとされるが、特に当時は哲学者の加藤弘之  
 （一八三六—一九一六年）らが提唱していた唯物論的な社会進化論が  
 広まりを見せており、それへの反論が円了の念頭にあったという。

鈴木が「円了の目論見は、当時の社会にはびこる実利主義、神儒仏  
 道を否定する世俗的な科学主義あるいは近代主義なるものの批判であ  
 り、それら主義を支え、権威づける唯物論的な思考を破壊するところ  
 にある」[鈴木二〇一一：三二]と述べているとおり、円了は近代科  
 学の有用性を認めつつ、それが人間の精神的活動よりも上位に位置づ  
 けられることによって、仏教・儒教・神道といった宗教思想が伝統的  
 に培ってきた道徳・倫理的な生き方・価値観を損なうことを危惧して  
 いる。その理由の一つは、それが国体の護持・発展と連結しているか  
 らである。一例として、円了は明治維新のスローガンの一つである  
 「富国強兵」について、『靈魂不滅論』にて次のように語っている。

わが国も将来、欧米の強国と一大戦端を開くことなしとは申され  
 ませぬが、その準備には国民全体にこの精神を与うること最も肝  
 要であります。その他なにことをするにも、決死の精神ほど大切  
 のものはありませぬ。しかして、その精神は靈魂不滅説より起こ  
 るとすれば、その説こそ実に国家の独立を保護するの金城鉄壁に  
 して、富国強兵の基礎と申してよろしい。[井上二〇〇〇…  
 三六八]

上記以外にも、円了は『靈魂不滅論』の末尾でこの論を受け入れることの効用をいくつか挙げている。第一に、不幸、不運、病氣、災難、貧苦などの苦境に立たされている人が精神的救済を得られるとして、それを明らかにすることは学者の使命であるとする。そして第二に、三世にわたる善悪の応報を信じることで良心が満たされるとして、これは宗教の役割であるとしている。学問の目的は社会の発展、人心の安定、ひいては国体の維持にあるという円了の主張は、論敵である加藤なども共通するものであり、当時の社会情勢を反映したものである。円了にとっては「護国愛理」は『仏教活論序論』以来一貫した主張であり、反唯物論や靈魂不滅論もそこに直結したテーマとして扱われている。

## (二) 普遍的法則に則った世界観・人間観

次に、円了の靈魂不滅論がどのような手順で展開されるかを見ていきたい。円了は「唯物論者の武器を奪って、その根柢から打ち破ろうと思います」〔井上二〇〇〇…三二六〕と述べ、合理性と普遍性を備えた法則との関連で靈魂を説明しようと試みている。

### ① 物質不滅＝質量保存の法則

物質不滅とは、さきに述べたる有を転じて無となすべからずと申

す規則とその意を同じくし、一切の物質は外面上にてはいろいろの変化を示し、固体は転じて液体となり、液体は化して気体となり、気体また変じて液体、固体となるも、その実、一分子、一元素たりとも、決して真に消滅することなしとの規則であります。〔井上二〇〇〇…三二六〕

科学的に考えれば、無から有は生まれえない。そして唯物論と云えども、人間に精神的側面があることは否定できないはずであり、我々が物質と精神からなるならば、精神は物質に内在していたはずだと円了は主張する。彼はこの精神を内在した物質を「原始的物質」という名で仮定しており、これが無機と有機（生物）に分かれ、さらに有機は無感（植物）と有感に分かれ、有感は無知（動物）と有知（人類）に分かれるという、一種の進化論を提示する。この原始的物質はあくまで論理上の仮定であり、その実在は確かめるべくもないが、円了は微細な分子や元素（原子）をさらに分割していった時、ついに分割できない状態に至るのではないか、それはもはや物質とは呼べず、精神と同じではないか、と推測している。

### ② 勢力恒存＝エネルギー保存の法則

今、物理学の用語をかりて申さば、勢力に潜力、顕力の二力ありて、外部に開顕せるものを顕力といい、内部に潜在せるときを潜

力といいますが、人の生時は精神の頭力となりたる場合にして、その死時は潜力に帰したる場合でありましょう。かく解釈するにあらざれば、勢力恒存の理法の立たざるはもちろん、有を転じて無となすべからざる原則に背くこととなります。「井上

二〇〇〇…三三五―六

物質は一定の空間を占有するが、精神は目に見えない。同じように、物質に内在しながら目に見えないものに、エネルギーがある。物体と運動エネルギーや位置エネルギーなどとの関係から見て、物質とエネルギーは表裏一体であることから、円了は精神とは意識性を持つエネルギーであり、物質（肉体）を通して外に表れているとき（生）と、物質の内に包有されているとき（死）があると考えている。すなわち、死は精神の消滅ではなく、精神の活動が停止した状態である。さらに円了によると、この道理は、個人の生死だけではなく宇宙全体の創造と消滅にも関わっている。

唯物論者も、この宇宙が進化してこの世界を現じたることは、定めて疑いますまい。しかるに進化は、ほかよりゴッドのごとき怪物が来たりて促したるのではなく、宇宙自らその体に固有せる大勢力によりて活動したるものである。換言すれば、自活自動の開発であることも必ず承知でありましょう。果たしてしからば、こ

れを活物と名づけずしてなんと称するであろうか。死物たる点はいずれにあるか、目や鼻や耳があるばかりが活物霊体ではない。いやしくも己に活動の力を具して、自ら開発することを得る以上は、みな活物たるに相違ない。（略）

すでに宇宙の活物霊体たるを知れば、それ自体に最大至高の精神を具することはもちろんなれば、われわれが有する精神は全くその一部分、一分子たることは、また疑われませぬ。これをわれわれの親として考うるも、われわれの精神はその一部分を賦与せられたるものと考えねばなりません。「井上二〇〇〇…三三六―七」

現在の宇宙は、原初の星雲的な状態から星ぼしが誕生するなど、進化とも言える過程をたどっている。円了は、これは宇宙そのものが意識性を持つ一大エネルギー（活物霊体）だからであり、その巨大なエネルギーの一部として人間などの個別存在の精神（＝靈魂）があると位置づけている。

拙者は数年前よりだんだんこの理を研究して、宇宙には本来一大勢力の永存せるありて、世界万物はその活動より生ずる現象なることを発見いたしました。しかして、その大勢力は本来、精神的意識性のものなれども、活動の影響として勢力の海面に無類の

波を湧かし、その波の固着したるものが物質となりたるものと考  
えます。「井上二〇〇〇…三三八―九」

円了から見て、この精神と物質、個人の靈魂と宇宙を生み出す一大  
エネルギーとの関係を最も明らかに論じているのは仏教であるとい  
う。円了は北宋初期の禅僧である契嵩（一〇〇七―一〇七二年）の  
『輔教編』、栄西（一一四一―一二二五年）の『興禅護国論』、『華嚴經』  
の唯心偈の冒頭部分などを引用しつつ、我々の心が世界（すなわち物  
質）を生み出すという唯心論を唱えるが、その中で「いわゆる一心の  
体はすなわち真如と称し、世界万物の本体であると申します」「井上  
二〇〇〇…三四一」と述べていることからわかるように、円了の主  
張の枠組みが真如縁起説に基づいていることは明らかであろう。ただ  
し、真如を精神性を持った存在としてとらえる解釈は『大乘起信論』  
などには見出すことはできず、密教の法身仏の影響か、または円了独  
自の表現と思われる。

### ③ 因果相統Ⅱ万物の因果関係

①の物質および②のエネルギーは、原因と結果の連鎖の中で総量が  
変わることなく存続してきている。合理的立場に立つならば、精神  
（靈魂）も物質と同様連鎖しながら存続し、途中で消滅することはな  
いはずであり、円了はこれに関して次のように述べている。

宇宙間に精神的一大勢力ありて、その体内に無始以来の種々雑  
多の原因事情をおさめ、その結果によりて、この世界もわれわれ  
も、みなその形を結ぶようになりたることを承知してもらいたい。

これらを仏教にては前世の宿因、業報、業感等と申し、これを進化  
論にては遺伝と申します。かくして、われわれがこの世に生まれ  
きたりて、他日また老い去るも、やはりわが勝手にてしかるにあ  
らずして、生まれし以前、永い間の原因の引き続きなるに相違な  
いと同時に、われわれ一代の間になしたる一切の言行が、善にあ  
れ悪にあれ、またみなその原因を助けて、死後再び身を結び生を  
現ずるようになり、未来無限の時間の間には、幾回となく生々滅々  
する道理であります。この道理は拙者が勝手に申すのではなく、  
勢力恒存、因果相統の理法が拙者に教えてかく言わしむることな  
れば、もしその説を不都合と思う御方は、この理法につきて、よ  
く尋ねてみるがよろしい。この理法は無我無欲であるから、別に  
入門料や束脩（そくしゅう）の心配はいりませぬ。拙者も幸いにその理法の指導  
によりて、人間の死は真の死にあらずして、一時の眠息なること  
を知ると同時に、他日再び醒（せい）覚するときあることが分かり、はじ  
めて数十年来かつ迷いかつ苦しみいたる胸中が、一時に豁然とし  
て開け、万里雲晴れて、月まさに中するがごとく心地するようにな  
りました。「井上二〇〇〇…三四七―八」

人間の肉体が人によって違うのは、過去の精神に原因があるためである。仏教で説く前世の宿業は、遺伝として説明することもできる。したがって、死は終わりではなく眠りのようなものであり、いずれ再び目覚めて新たな生を歩むことができる。

なお、因果には善と悪があるが、これは真如に合致する方向か否かで判断される。円了は、

かくして善悪因果を立つる以上は、善果の最上と悪果の至極との両端があるべきはずなれば、その善果の方を極楽とし、悪果の方を地獄としたるものなるが、これ、もとより当然のことと考えます。いやしくも真如界と生滅界とを論ずる以上は、善悪因果を説かねばならず、善悪因果を説く以上は、地獄極楽を立てねばならぬことは、自然の道理の教ゆるところにして、決して不合理、非論理たるわけではありません。ただ、地獄の鬼や釜かまの話、極楽の蓮華や音楽の話は道理以外のことにして、もし宗教外よりこれをみれば、苦楽の状態を形容したるに過ぎざることになります。換言すれば、これ、信仰上の問題にして、道理上の問題ではありません。[井上二〇〇〇・三五四]

と述べ、生前の行為（原因）に善悪がある以上、結果でそれを表現したのが地獄や極楽であるとする。ただし、それがどのような様相をし

ているかは信仰上の問題であり、信仰を抜きにした場合には、苦楽の状態を例えた表現として受け取ることになる。

また、円了によれば、この善悪の解釈は進化論とも矛盾していない。宇宙の目的は進化にあるという前提に立った上で、様々な事情・関係によって、個別の事例としては進化もあれば退化もあるとし、「その進化の因果を善とし、退化の因果を悪とすれば、進化論もやはり善因善果、悪因悪果の規則を用うることとなります」[「同右」と結論づけている。

### (三) 理性による真理追及の重要性

以上、円了は進化論、宇宙の始まり、分子・原子といった当時の科学的見解を、仏教を中心とした宗教的哲学思想と組み合わせて靈魂とは何かを論じているが、反対論者から「非科学的・空想的」などの批判が寄せられていたことは、鈴木が指摘した通りである。これに対して円了は、カントの用語を借りて、人間の精神のはたらきの中でも、不可知なものを論理的に追及する理性を最も中心的・根源的なたらしきと位置づけ、これによって靈魂の有無を考察したとき、結論は上記のようにならざるを得ないとする。円了によれば、唯物論は感性と悟性の対象となるが、理性を満足させることはできないのである。

人の性質に感性、悟性、理性の三とおりあることは、ある哲学者

の申すところでありますが、拙者もこの名目を用いて、まずその解釈を述べれば、感性とは感覺性のことにして、耳目の感ずる作用をいい、悟性とは理解力のことにして、普通の実験論理によりて事物の道理を了解する作用をいい、理性とは前二者の上に位して、到底実験も人知もはるかに及ばざる絶対無限の境遇に、体達超入する作用をいいます。ゆえに、理性はわれわれの思想中、最も高尚深遠なる超理的想像、すなわち理想にして、わが心と不可知との関係は、全くこの性力の上に存するに相違ない。しからざれば、われわれの心中に無限絶対、不可知的等のが分かるはずはありません。よって拙者は、この理性を無限的心力と解し、哲学と宗教との二者を結合する心力であると考えます。「井上二〇〇〇…三五九―六〇」

理性より起こる想像を円了は「理想」と呼ぶが、靈魂不滅論はまさにその一種と言える。円了によれば、この理想は単なる不合理な空想ではなく、多苦多患の人、失意の中にある人、すなわち仏教で言うところの生老病死の問題に悩んでいる人にとって、状況を好転させる希望を与え、善を行おうという意欲を起こす力を有している。それは法律だけではカバーしきれない人心の安定をもたらし、また社会や国家のために活動したいと願う志士が、毀譽褒貶に左右されることなく、「社会国家に対して寸善尺徳を施した」「井上二〇〇〇…三六九」との

安らかな境地で生涯をまっとうする上でも、有益であるとしている。

なお、因果応報や輪廻転生といった仏教の思想が民衆の教化に有益であるという主張は、江戸時代に儒教からの因果否定論に仏教が応える上で用いた、護法論における回答のひとつであった「前田二〇一〇…一三七―一四三」。円了の実践哲学にもまた、『仏教活論序論』などで明らかなように、明治維新の神仏分離・廃仏毀釈を受けて護法論的な立場が反映されている。『破唯物論』や『靈魂不滅論』は日清戦争（一八九四―九五年）の後に執筆されており、円了にとって靈魂不滅論の理論化と普及は、純粹に理性をはたらかせて世界と人間の本質的な関係を追究する知的興奮をもたらすのみならず、仏教を中心とした東洋思想の社会的応用という点からも重要だったと考えられる。

## 二 妻木直良の『靈魂論』

### (一) 執筆の動機と前田および妻木の立場

円了の『靈魂不滅論』の七年後に刊行された妻木直良の『靈魂論』は、構成として総論と五篇からなり、五篇のうちの第一篇はインドの六派哲学と経量部などの「我」論、第二篇は説一切有部の業論、第三篇は唯識派の阿頼耶識説、第四篇は真如論、第五篇が原始仏教の無盡魂説となっている。

この書には前田慧雲による評論がまえがきとして附されており、そ

れによると前田は長らく圭峰宗密（七八〇―八四一年）の『原人論』にならない、仏教の各宗の教義に加えて、キリスト教、西洋哲学、六派哲学などの説も加えて批評し、靈魂の滅不滅を一般人にもわかりやすいかたちで記述したいと考えていたという。しかしなかなか実現できなかったところ、妻木がこの原稿を持参し、一読して自身が出したかった「新原人論」とほぼ同じであると感じたところから、「評論」と全体の校閲を引き受けたという。前田自身は「評論」において、靈魂の有無や三世因果の真偽について、当時の学者の間でも諸説あることは承知の上で、「三世因果、靈魂相統といふことは、靈魂生滅論よりは、余程多く世教に利益ありと思ふ」「妻木一九〇六・二五」とし、またこの問題に学問的に決着をつけるのは困難だが、「實際分らぬ事柄に向ふて、我々の小さき智識より推理して、直に断案を下し、人に向ふて、其説を主張するといふは、何たる心ぞや」「妻木一九〇六・一七」として、軽々しく靈魂の存在を否定することには警鐘を鳴らしている。靈魂相統説が道德的な善の励行に役立つという観点は円了の主張に類似しており、またこれらの記述から判断するに、前田は三世因果、靈魂相統については肯定する立場に立っていたと見て良いだろう。

ただし、妻木の立場については、前田と完全に一致していたのかは検討の余地がある。なぜなら、『靈魂論』の第五篇には阿含經典に基づく無靈魂説が紹介されているからである。円了の時点ではいわゆる

初期仏教の無我説については言及されていない。前田は「評論」の最後で水波の喩を用いつつ、五蘊和合の自己を小我と呼び、それを捨てて大乘で説くところの大我に帰することが、仏教に限らずすべての宗教の目標ではないかと主張している「妻木一九〇六・二二―二七」。それに対して妻木は、どの説が正しいとは明言しないが、「第五篇余が見たる原始仏教」と題して、阿含經典の無我説を自著の最後に位置づけている点は注意すべきだろう。それについては後に検討するとして、まず妻木の『靈魂論』における円了の思想的影響について確認したい。

#### （二） 第四篇真如論における靈魂觀

妻木は第四篇真如論において、天台で説かれる地獄から仏陀までのいわゆる十界について、地獄・餓鬼・畜生・修羅は人間の靈魂の向下墮落を示し、天上・声聞・緣覺・菩薩・仏陀は向上進歩を示したものであると解釈している。そして、『法華玄義』に説かれる「此の心は幻師なり。一日夜に於いて、常に種々の衆生と種々の五陰と種々の国土とを造る」（大正三三、六九六上）という文言を解説するなかで、「是の向上進歩と向下墮落は、来世にのみありと思はば、そは天台教の真意を知るものにあらず」「妻木一九〇六・二九七」として、これは死後だけではなく、今生きている人間の靈魂の状態を表したものであるとする。



一日夜に於て常に種々の衆生と種々の国土とを作ると云ふときは、現前一念の心若し貪欲ならば、同時にその人の靈魂は餓鬼の靈魂にして既に人のものにあらず、(略)若し大なる慈悲の心ならば、同時にその一念の靈魂は仏陀たるなり、さればかくも人間の相性体即ち靈魂が地獄化したるときは、その力も作も因も縁も果も報も悉く地獄なり、五蘊も地獄なり、国土も地獄なり、之に反して仏陀化したときは、その力作因縁果報は勿論、五蘊も国土も悉く仏陀化し極樂化すべし、(略)

一日夜中にも向上と墮落の両極端に達するものとせば、向上と墮落の両途は、但に來世にありと思ふべからず、若し一たび意馬心猿の狂ふに任ずるあらば、來世の有無、問ふの要なし、現在世に於て實に人間の靈魂を失ふものなり、之に反して一たび心を向上の理想に樹て歩々進んで息まずんば、その人は早や既に超人間なり、超世間なり、(略)遂には永遠不死なる、常住快樂なる悟界に達すべし「妻木一九〇六・二九八―三〇〇」

ここでは、天台で語られる「心」や「一念」を靈魂と読み替え、三世因果や死後世界を疑うよりも、現在生きている自分の一瞬一瞬の心(靈魂)が十界のどれに相当する状態にあるかを自覚し、悪心・悪念を離れることで、この世を浄土化し、自身も仏陀の境地に向けて向上

進化することを目指すべきであると述べられている。円了の思想との直接的な関連性は見られないが、地獄や極樂の實在の有無よりも現実の人間の生き方に焦点をあてる姿勢は、靈魂觀について論じつつ、死後世界について「地獄の鬼や釜かまの話、極樂の蓮華や音楽の話は道理以外」であり、そういった來世のイメージはあくまで各自がそれぞれどう信じるかという「信仰上の問題」であるという円了の態度にも通じるものがある。これは近代知識人にとってもはや信じがたくなっている一部の仏教思想について、合理的な解釈を行ったものと見る事ができる。

ただし、円了と妻木との間には、思想的な立場の違いも見られることには留意すべきであろう。円了は先に本論で紹介した三つの普遍的法則に基づいて論理を展開し、「善惡因果を説く以上は、地獄極樂を立てねばならぬ」として、仏教で説かれるこれらの法則を正しいと認めれば、道理上、死後であっても地獄や極樂に相当する何らかの応報が生じるはずであるとの立場に立っている。これに対し、妻木は「現象界の一念の当処に、直ちに現象界の三千を具すと語るが天台円教の意なり」(妻木一九〇六・二九二)として、天台教学に基づいた解釈によれば、今生きているこの場、この一念において、地獄から仏界までの十界がすべて具わっており、それによって「來世の有無、問ふの要なし」との解釈が可能であるとの立場に立つ。

このように、円了と妻木の間には明確な相違点も見られるが、あえ

てもう一つ両者の共通性を挙げるならば、妻木は先に述べた靈魂とは五蘊すべてのことを指すとした上で、次のように語っている。

五蘊には離合集散あり、念々に生滅し、刻々に変化す、死の時は、その離散なり、生の時はその集合なり、集合して衆生となり、国土となり、離散して五蘊世間となる、たとい集合離散はありとも、その勢力は不滅なり、一たび結んで個体を成せし上は、個体の形は消滅すとも、個体の力は消滅せじ、(略)苟も動と静との二方面が宇宙の大真理にして是れ取りも直さず宇宙の大靈魂なりと知らば、我等個性の五蘊も、などか、是の位置に達せざるべきや、一たび動きし波は世界の辺際までその余波を伝えざれば止まざる如く我等の靈魂も、是の大靈魂に冥合融和するにあらざれば休息の時なかるべし(以下略)〔妻木一九〇六・三〇二―三〕

五蘊は精神的要素と物質的要素からなるが、両者がともに「靈魂」と呼ばれているのは、「五蘊に一定の性質なし」〔妻木一九〇六・三〇二〕とされるからである。つまり、色受想行識の区分は絶対的・固定的なものではなく、いずれも空性という本質において同じであるということだろう。また、この箇所で「宇宙の大真理」「宇宙の大靈魂」とされているのは、いわゆる真如である。それと我々の五蘊すなわち靈魂が一体化することを説いているため、趣旨としては円了の活

物靈体の説にかなり類似している。妻木は天台が説く空仮中の三諦説に基づき、無靈魂・無宇宙とは空に基づいた解釈だが、仮(縁起的な有)と中(実相＝真如)と合わせてトータルに解釈しなければ偏りが出るとしている。

### (三) 原始仏教の五蘊無我説

一方、『靈魂説』の最後に、妻木はいくつかの漢訳阿含經典を踏まえて、外道哲学の「我」は一般の人々が思い描く靈魂によく似ているが、「若し是の如き意に依りて論ずれば仏教は、全く無靈魂説なり」〔妻木一九〇六・三二一〕として、不変的・実体的な「我」の存在は原始仏教の段階から否定されると判断している。五蘊の中に意識は含まれるが、これも肉体が死ねば消散してしまう。不滅であることがわかるのは、因縁の力や業のエネルギーのみだというのが妻木の見解であり、最終的には次のような結論に達している。

- 一 仏教を以て靈魂不滅説なりと云うものあらば、その靈魂とは普通に云う意識にあらざして、頼耶識のことか又は業力のことならざるべからず、
- 二 意識は消滅すべし、業力は不滅なり、
- 三 因果の關係を除きて万物に永久不滅のものなし〔妻木一九〇六・三二六〕

つまり妻木は、円了の主張に込められていたような有部の業感縁起説や大乘の阿頼耶識縁起説などを踏まえれば霊魂不滅説は主張できるが、業はともかく何らかの意識の三世にわたる存続については、原始仏教まで遡って適用させることは困難だと考えていた、ということである。円了の『霊魂不滅論』刊行からわずか七年ほどしか経っていないが、原始仏教のために一篇を割いて考察している点から見ても、当時の仏教学研究において初期仏教經典に基づいた無霊魂説が注目されていたことが伺える。

### 結論

本論では、円了が霊魂不滅論を提唱し、科学的な法則と仏教のさまざまな思想を組み合わせることで、霊魂不滅を認める有益性を主張していることをまず確認した。そして、その数年後の明治末に活躍した妻木直良が、円了と同様の真如縁起説などを紹介しつつ、原始仏教に限って言えば不変の実体を持つ霊魂（我）は認められていないと解釈していた点についても検討した。以下に、両者の霊魂論の特色をまとめてみたい。

円了の霊魂観は仏教の様々な縁起思想を用いつつ、それらをダイナミックにまとめ上げ、宇宙規模の壮大な世界観として展開させている。円了自身、この霊魂観の中には神道や儒教も含めることができる

と考えており、『霊魂不滅論』の末尾には関連する文献の文章を多数列挙している。また、仏教的な思想のみを見ても、部派仏教と大乘仏教の区別を明確にしないまま、円了にとって必要と思われる説が適宜使用されている。したがって、学問的な分析よりも円了独自の視点や解釈に基づいて仏教をはじめとする東洋思想が霊魂観を中心に再編纂されたかたちになっており、村上专精（一八五一—一九二九年）とは異なるが一種の「仏教統一論」に近い様相を見せていると言っても過言ではない。

一方、妻木の『霊魂論』は学問的な厳密性を重んじている。したがって、個人的な霊魂と宇宙的な霊魂との関連、実践的な天台教学の解釈など、円了と類似した主張も含まれるが、各縁起説が個別に解説されており、円了のようにそれらを統合して新たな霊魂観を提示しようという意図はあまり見られない。また、出版された時期が日露戦争（一九〇四—一九〇五年）と重なるにもかかわらず、社会や国家への仏教の貢献について、一切言及していない。これは阿含經典の無我説を確認している点と合わせて、円了との大きな相違点である。霊魂不滅論の社会的な効用を強調していた円了と比較した場合、妻木はあくまで仏教の霊魂不滅論は個人の生き方の向上に資するものとして位置づけていたのではないだろうか。以上の点から総括すると、妻木の関心は仏典研究を通じて、霊魂観の変遷、および原点である釈尊の思想を確認することであり、仏教を中心とした東洋哲学の霊魂観を近代日

本人の精神的支柱とするべく再構成しようとした円了とは、かなり異なる立場で靈魂論を扱っていたと考えられる。

【キーワード】

井上円了、前田慧雲、妻木直良、『靈魂不滅論』、『靈魂論』

註

(1) 円了がこれらの縁起説を仏教思想の発展過程としてとらえていたことについては、佐藤厚による「佐藤二〇一三」、「佐藤二〇一五」といった研究成果がある。

【参考文献】

- 井上円了著、東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第七卷、東洋大学、一九九〇年
- 井上円了著、東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第十九卷、東洋大学、二〇〇〇年
- オロバル、ベルナット・マルティ「井上円了と清沢満之の靈魂不滅論について」、『国際井上円了研究』七、国際井上円了学会、二〇一九年
- 佐藤厚「井上円了『八宗綱要ノート』の思想史的意義」、『井上円了センター年報』二二、二〇一三年
- 佐藤厚「吉谷覺寿の思想と井上円了」、『国際井上円了研究』二三、二〇一五年
- 鈴木由香里「井上円了と唯物論論争」、『井上円了センター年報』二〇、東洋大学井上円了記念学術センター、二〇一一年
- 妻木直良『靈魂論』文会堂、一九〇六年
- 前田勉「第三章 仏教と江戸の諸思想」、末木文美士ほか編『新アジア仏教史』三 日本Ⅲ…民衆仏教の定着』、佼成出版社、二〇一一年、一二八―二七七頁